

5 つまものとして、江戸東京で生産された野菜。

つまものの中で野菜として、江戸東京で引き続いて生産されたものに、どんなものがあるだろうか?。これがなかなか難しい問題であった。私の江戸東京の野菜探究の40年になる年月でも、ほんの入り口を覗いただけである。まず、文献、資料の類が見当たらない、そしてそれらの生産は言うなれば、企業秘密であるからである。実地に聞いたことであるが、嫁さんの実家にも話さない、見せない、もし嫁さんが洩らようなことが有れば、当然離婚して実家に返すなどと言う話を聞いては、農業の技術員の身ではとてもでないが、「聞き取り調査」などは出来ない。某技術員がつまものの実態を、園芸雑誌に載せたところが、つまもの同業者の総好かんを食らって、在任中はその後相手にされなかったと言う実話がある。ともかくなかなか難しい問題を含んでいる。刀鍛冶が仕事場に他人を入れなかったという、江戸時代の話があるが、それと似通った点があるのである。要するに技術を盗まれるからであろう。

私が青果市場でつまものを調査したときも同様であった。とてもだが「聞き取り調査」などできる雰囲気ではない。旧神田市場でつまもの問屋の店先を写した時も、同様で有った。余談になるが、この神田市場も江戸東京と数百年にわたって、青果市場として存続したのだが、流通革命のトラックによる輸送で、道路の隘路で移転せざるを得なくなったのである。始まりは神田川の佐久間河岸(船運)などを中心に、江戸の初期に青果市場ができ、その盛んな模様は、『井原西鶴』(1642~98)の著書にも書かれていたが、関東大震災(1923)で壊滅して、鉄道駅の秋葉原に移転し、輸送がトラックになると道路が狭小なので、埋め立て地に移転してしまった。青果市場移転の記念碑があったが、現在どうなったのだろうか?、その後地主の東京都はIT革命に備えて、電気器具街のセンターを造るべく、最近工事が始まった。地上数十階の高層ビルと聞いている。有為転変世の倣いと言いながら、電気街に用足しに出掛けるたびに、回顧の情に耽るのである。

写真 23 旧神田青果市場のつまもの屋の店先

「もろ胡瓜」や「芽物」の箱、茗荷、
束穂、あさつきなどが見える。

